十勝毎日新聞

発行所
十勝毎日新聞社
〒080 帯広市東1条南8丁目
電話＝編集㉒2121、広告㉓2323、総務・販売㉔2222

©十勝毎日新聞社 1988

十勝と宇宙開発

国際シンポ出席者座談会 ㊦

シンポは大成功

理解された熱意と可能性

第一部

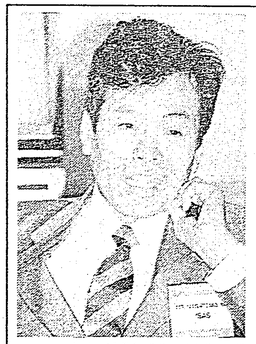
＜出席者＞

航空宇宙技術研究所宇宙研究グループ総合研究官
山中　龍夫氏

宇宙科学研究所教授（東大教授）
長友　信人氏

マサチューセッツ工科大学政治学部
R・アロノビッチ氏

司会　小野寺　裕（本社政経部）



宇宙基地・十勝の可能性について語る（上から）長友、山中、アロノビッチ氏

第十六回宇宙技術および科学の国際シンポジウム（ＩＳＴＳ）が先月末、札幌で開かれ、世界十七カ国から約七百人の研究者が集まり、交流の輪を広げた。期間中、十勝毎日新聞社はＩＳＴＳに出席した国内外の一流研究者による二つの座談会をセットし、「十勝と宇宙開発」をテーマに各氏からさまざまな提言を受けた。第一部は航空宇宙技術研究所宇宙研究グループ総合研究官（工学博士）、山中龍夫氏、宇宙科学研究所教授（東大教授、工学博士）、長友信人氏、米マサチューセッツ工科大学政治学部、ローレンス・アロノビッチ氏に、宇宙基地誘致に取り組む十勝の可能性について語ってもらった。

司会　まず、ＩＳＴＳの札幌開催の感想から。

古い認識吹き飛ぶ

長友氏　日本の宇宙開発はシンポや曲がり角に来ている。一昨年から政府の委員会で宇宙開発の長期ビジョンが取り上げられて、今までの通りだとどうというのはとんでもないーなった。

むしろこの次（二年後）をどうしようか、という心配が逆に出るくらいだ。このシンポジウムは東京に帰るかもしれないが、北海道で盛り上がった機運をどう続けていくかが課題となるだろう。

やはり学界としての質のレベルを上げるのはもちろんだが、北海道としても何かプロジェクトを打ち上げるべきだという話になっただろう。北海道が宇宙、宇宙と騒いでいるが、うまくいくのかーというのが今までの古い認識。しかし、実際に開いてみて、参加者が一番多く（十七カ国から七百人の研究者が出席）、今まで東京しか知らなかった外国人が日本のフロンティア・北海道を見て、古い認識や心配がすべてふっとんだ感じになまのがいらないということになるので、これを幅広く利用しなければ、ということで検討が始まった。ちょうどそのころから北海道でＩＳＴＳのシンポジウムを開いては、という話が出た。これはタイミングがよかった。

五年前だと北海道で開くなるが、うまくいくのかーというう。このプロジェクトはたぶん成功すると思うが、そのはまたあとで詳しくしよう。

広さが充実生む

山中氏　今回のＩＳＴＳは変わった。世界的な視点で、寄与する方向で見方を広げるということだ。

しかし、まだいろんなものが足りない。まず輸送手段、活動拠点などインフラストラクチャー（基盤整備）が足りない。これは活動の前提となるものだけに国ががんばらなくてはいけないだろう。

それから産業構造そのものの見直しも必要だ。それはまさに北海道のテーマでもあるが、その中には宇宙もある、情報、サービス業もある、そして製造業もある。製造業はギブアップするのか、というとそこに宇宙が出てくる。

現在は情報の発信場所が東京に集中している。しかし、いつまでも宇宙と情報の創造場所が大都会でいいのかーというとそうではない。現状は十分でなくてもこの点で北海業も参加し、中身が広がっている。その理由は広さだ。東京で十五回開催したが、あそこは人は集まるが、とにかく狭すぎる。自由な展示などとてもできない。今回札幌で開催し、今までの制限が破れたという感じだ。

宇宙に対してだれもが実り多いものである、という期待を持っていて、やめろ、という人はいない。しかし、昨年まとめた長期政策懇談会のリポートの大きな議論は、日本が十一三十年先をみて、経済的なリターンだけをみて宇宙開発を進めていいのか、ということだった。日本の役割は

司会　それではアロノビッチさん、今回のＩＳＴＳの印象は―。

到達する努力大切

アロノビッチ氏　百年前マサチューセッツからクラーク博士が北海道に来て「少年よ大志を抱け」と言った話をうかがった。大志とは未来を見通し、何年か後に自分がどの地位、位置にいたいかはっきりとした意思を持ち、到達する努力をすることだ。

北海道が十五回の歴史を持つＩＳＴＳを初めて東京以外のこの地で開いたのは非常に賢明。大志を抱いているのがよくわかった。

宇宙開発から生まれた技術は他の分野にも応用できる。地域経済への波及効果はもちろん、国レベルの経済にもすばらしい影響を与えてくれる。そこに目をつけた北海道の熱意にとにかく感心した。

（つづく）